

新人類か絶滅危惧種か

(1)日本人は絶滅危惧種か？

生活習慣病予防の講演会で、興味のある話を聞いたことがあります。

欧米人は、食事を始めると数分後には多くのインシュリンが出るので、消化の良い高カロリーの食事をしても、糖尿病にならないそうです。

一方、小太り遺伝子を持ち、飢餓の時代に適した遺伝子をもつ日本人は、インシュリンの分泌量が少なく、また時間をかけて少しずつ出るのだそうです。日本人は、飢餓の時代に生き残るために、消化の悪い穀類を時間をかけて噛み砕き、消化するような生活習慣の遺伝子になっているようです。

日本人の食事の欧米化が進み、消化の良い高カロリーの食べ物が増えたことにより、食事を開始して短時間に血中のブドウ糖の量が急激に増加します。日本人は、短時間に急激に増加する血中のブドウ糖を処理できず、糖尿病になるようです。

食べ物の豊かに時代に、日本人が食欲に任せて飽食を続けると、肥満になり、糖尿病を患うことになります。

日本人は飽食の時代において、糖尿病を原因とする絶滅危惧種であるとの話でした。

(2)人間の進化の定義

人間の進化が、脳の発達として捉えられるとき、進化の本質を考える必要がある。

人間が遺伝子として持つ生体内遺伝子の変化は、千年単位で起きるものであり、その進化は非常に遅いものです。

一方、人間文明の発展は、社会に蓄積されてきた科学技術などの急速な蓄積により、実現したものです。脳は、コンピューターに例えれば、ストアプログラム方式の情報処理を行っているといえ、脳にストアされるプログラムが、科学技術などの情報です。

このような、文明として社会により引き継がれてきた各種情報は、生体外の遺伝情報と呼ぶことができます。

即ち、人体を媒介とする、生体内遺伝情報と、社会を媒介とする生体外遺伝情報の総体が、人間の進化を表すものといえます。

(3)人間の食料の歴史

3-1 飢餓の時代

人類が誕生してから現在までの歴史は、食料が不十分な時代であり、飢餓との戦いの歴史であったといえます。

人間の遺伝子は生命の存続のために最適化され、エネルギーを蓄える能力をつけてきました。

人間のエネルギー源はブドウ糖であり、人間の味覚は甘みや脂肪に旨みを感じるものになっております。

3-2 飽食の時代

農業の生産性の飛躍的な増大により、人類は飢餓の状態から脱することができました。

食料は豊かになり、いくらでも食べることができるようになりました。

美味しいものを追求する食生活は、ブドウ糖を生体内に蓄積するための生活となります。

(4)生体内遺伝情報の不適合について

飢餓の生活に適した人間の生体内遺伝情報は、美味しいものがあればできるだけ沢山食べるように、働きます。

農業の生産性の飛躍的な増大により、人類は飢餓の状態から脱することができました。

飽食の時代に、無制限の食欲は、肥満と糖尿病を招きます。

人間の食欲と飽食の社会が、不適合になっていることを意味します。

生体内遺伝情報から発せられる食欲と、生体外遺伝情報が生み出した飽食社会のコンフリクトといえます。

(5)生体内遺伝情報を制御する新人類

飽食の時代に、健康体を保つためには、食欲のコントロールが必要です。

飢餓の時代には、命を保つために、生体内遺伝情報の指令に従って、食欲を満たすことが必要でした。

生体内遺伝情報に従って生きることが、人間の基本的な生き方でした。

医学の進歩は、糖尿病の予防には、カロリー摂取の制限が有効なことを示しました。

飽食の時代には、生体内遺伝情報から発せられる食欲の制限が必要です。

つまり、生体外遺伝情報が生体内遺伝情報の働きを制限することになります。

このように、生体外遺伝情報で生体内遺伝情報を制御できる人間は新人類であるといえます。

今や、人間は、飽食の社会に生きる社会的動物としての新人類といえます。

2012年5月17日
(有)中野情報技術研究所
中野 敬三 記